

第1回原子力委員会 I T E R 計画懇談会の結果について

平成9年2月10日

核融合開発室

1. 日 時 平成9年2月10日(月) 10:00～12:15

2. 場 所 科学技術庁第1、2会議室(科学技術庁2階)

3. 出席者

(原子力委員) 伊原委員長代理、田畑委員、藤家委員

(委 員) 飯田委員、飯吉委員、猪口委員、大河原委員、大田委員、
草間委員、伊達委員、苫米地委員、中里委員、那須委員、
平山委員、増本委員、宮委員、宮島委員、吉川(弘)委員、
吉川(允)委員 (16名)

(科学技術庁) 加藤原子力局長、今村官房審議官、田中核融合開発室長
その他、関係者等 29名

4. 傍聴者

(一般傍聴者) 20名(希望者34名より、抽選により20名を選出)

(プ レ ス) 24名(カメラマンを含む)

5. 概 要

(1) 東京大学長吉川弘之委員が座長に選出された後、I T E R 計画の概要等について説明がなされた。

(2) 今後の進め方に関する検討について

各委員より今後の検討の進め方について自由討論が行われ、座長より、本件については、次回までに事務局にて論点整理をするよう指示があった。

各委員からの主な意見は以下のとおり。

- 1) 非常に大事な研究であり、日本に対する国際的な評価も高い。若い世代の意見を聞くことも必要。大学のバランスも考えた進め方の検討が必要。
- 2) 人類的な問題として国際協力が重要。日本の国際貢献は、安全保障の面では限界があるが、科学技術的な貢献は、政策的、知的にも魅力的。エネルギー問題は、日本のような無資源国としてはわかりやすい貢献。

- 3) 国際的な動きと懇談会の検討はどうかかわるべきか。資金問題をこの懇談会でどのように扱うかどうか考えていく必要がある。
- 4) 誘致については、プラス面とマイナス面（例えば財政的な面）等について十分議論し、白紙の状態で見えていく必要がある。
- 5) 学術会議の関心も高い。やるならば、日本がリーダーシップをとって欲しい。
- 6) 何故核融合が必要なのかに立ち返って考えるべき。
- 7) 核融合は将来のエネルギー源として大きな手段となることは確信される。ここで失敗はできない。長期的な研究開発であり、性質からいって民間にはなじみにくく、国で進めて欲しい。
- 8) 原子力分野の民間の技術者の維持のためにも重要。
- 9) 技術開発を進めていくうえで、必ずしもバラ色の面ばかりではないかもしれないが、解決できないことはないと思う。始める勇気を持つことが大切。始めた後、できないことが明らかになれば、止める勇気を持つことも大切。
- 10) 学問的研究と財政力が相容れないなら、研究自体を国際貢献として政策の問題として推進すべき。人材養成にも寄与する。原子力の平和利用は避けて通れない。
- 11) ITERの周辺技術の開発も必要。核融合は工学的な実証が必要な時期に来ている。

<座長とりまとめ>

- 1) 核融合は、科学にとどまらず、人類の課題に科学技術がどう貢献するかといった典型的なテーマの一つである。少なくともその哲学というものを明らかにしていく必要がある。
- 2) 国際的な中ではじめて主導権をとって日本がどこまでできるか、あまり経験したことのないやり方でやるものであり、リーダーシップをとれるかが課題。
- 3) 広がりを持つという意味では、決して専門家だけのものではなく、科学者でも行政者のみでもなく、人々一般に広がりを持つ問題である。
- 4) 核融合が人類にとって、何を意味するかシナリオがある程度明らかできれば、この懇談会の成果となると思う。

(3) 次回(第2回)懇談会は4月9日(水) 13:00~15:00の予定。